

令和 4 年 6 月 24 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00402

研究課題名(和文) 文筆家としてのコールリッジのプロフェッショナリズム - 文学・哲学講演と後期の著作

研究課題名(英文) Coleridge's Professionalism--Literary and Philosophical Lectures and his Later Works

研究代表者

園田 暁子 (Sonoda, Akiko)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：00434564

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：S. T. コールリッジは、文筆家のキャリアの初期においても、また、阿片中毒からの脱却を目指して苦しんでいた1810年代においても、政治、文学、哲学の分野において多くの講演を行った。これらの講演は、彼の著作に比べればその重要性において低いものであると、コールリッジ自身も、また研究者たちも捉えてきた傾向があるが、特に1808年以降に行った講演は、コールリッジの後期のAids to ReflectionやOn the Constitution of the Church and Stateをはじめとする重要な著作に表された思想の形成過程において、非常に重要な役割を果たしていることを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コールリッジの文筆家としてのキャリアの中でも、比較的注目されてこなかった1808年～1810年代に彼が行った講演が従来考えられてきたよりも、彼の思想の形成過程や創作活動にとって大きな意味を持っていることを確認したことで、コールリッジの功績の再評価につながる研究ができた。この時期コールリッジは、健康や家庭の問題を抱え、創作においても失速したかに思えるが、この時期に行った講演は、1810年代半ば以降に書かれ、英米の読者に大きな影響力を持った『教会と国家の構成について』をはじめとする著作に重要な役割を果たしていることが確認できた。

研究成果の概要(英文)：S. T. Coleridge widely lectured on politics, philosophy and literature in his literary career, especially in the 1810s when he was struggling to escape from opium addiction. These lectures have been regarded by his critics and by Coleridge himself as work of smaller importance which he did urge by pecuniary needs. However, in this study, I have traced how the ideas expressed in his later important works such as Aids to Reflection and On the Constitution of the Church and State were developed through these earlier lectures.

研究分野：イギリス文学

キーワード：コールリッジ 講演 プロフェッショナリズム

### 1. 研究開始当初の背景

コールリッジの文学者としての仕事は、大きく分けて以下の三つの時期に分けることができる。1) 社会変革の理想に燃え、講演、ジャーナリズムの分野でも活躍、また詩人としても傑作を残した 1790 年代から 1800 年代前半の時期、2) 健康や家庭の問題を抱え、創作においても失速したかに思える 1800 年代半ば以降 1810 年代半ばまでの時期、3) 『文学的自叙伝』、『省察への導き』、『教会と国家の構成について』などの重要な作品を残した 1810 年代半ば以降、彼が亡くなる 1834 年までの時期である。そして、従来のコールリッジについての研究は、1) の時期を対象としたものに集中しており、ここ 10 年あまりの間に、3) の時期の作品の見直しが行われているという状況である。3) の時期のコールリッジの後期の散文作品も国内外の研究者の関心を集めるようになってきたが、1815 年以降に出版された散文作品が、彼の全功績において持つ重要性に鑑みた場合、十分な研究がなされてきたとは言いがたい。

また、Mary Anne Perkins の *Coleridge's Philosophy: The Logos as Unifying Principle* (Oxford: Oxford UP, 1994)、Douglas Hedley の *Coleridge, Philosophy and Religion: Aids to Reflection and the Mirror of the Spirit* (Cambridge: Cambridge UP, 2000)、など、彼の後期の社会批評にみられるキリスト教哲学の特質に迫る優れた研究はあるが、彼の哲学と信仰を融合させた後期の思想が、文筆家として直面していた問題に取り組む中で生まれてきたという視点からの研究は未だなされていないので、本研究はそこを補完するものとなると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、これまでのコールリッジ研究の中でも、あまり着目されなかった上記の 2) の時期の講演に着目し、そこに見られるコールリッジの思想の形成過程を分析、3) の時期の著作における 2) の時期の活動の重要性を明らかにすることで、コールリッジの功績のより包括的な再評価を行うことを目的とした。

商業の原理に基づく業界の中で生きざるを得ない文学者の創作と思想形成の実態に迫るといふ点において、William St. Clair の *Reading Nation in the Romantic Period* (Cambridge: Cambridge UP, 2004) に代表される、出版や読者の実態を明らかにする実証的研究と、コールリッジの思想の特質に迫る研究の融合を目指した。

### 3. 研究の方法

コールリッジのスタンダード・エディションに加え、ノートブック、書簡、彼が残した書籍の余白への書き込みなどを活用し、彼が講演の準備のためにどのような思索や読書を行い、それを講演という形にまとめていったか、また、講演で語った内容を後期の著作にどのように反映していったかを調査するという方法をとった。

### 4. 研究成果

コールリッジの文筆家としての人生は葛藤に満ちていた。一つには、彼がよく使った表現によれば、「頭」論理的思考と「心」キリスト教徒としての信仰を融合させることに苦心したからであった。また、もう一つには、彼が、『文学的自叙伝(Biographia Literaria)』の中で語っているように、創作というものは「他のいかなる心配にも悩まされない」時間においてなされるのが理想であり、「収入を増やし、評判を高めたいという希望が仕事へと向かわせる刺激になることはある」が、「それらを得る必要性に迫られ続けられれば、その刺激は麻薬のようなものになってしまう」からである(第二巻、224 ページ)。この説明からは、彼がいわば純粋に創作へと向かう気持ちと、創作によって得られる収入や評判を求める気持ちというものは相容れないものであると考えていたことがわかる。それ故に、『文学的自叙伝』の第十一章において彼は、文筆家志望の若者たちに、他に収入源としての職業を持ち、余暇を創作にあてることを勧めているのである。しかしながら、彼自身は、他に定職を持たずにいわばプロの文筆家としての人生を歩んだ。

本研究は、コールリッジが、創作はどのようになされるべきかという理想や文筆家としての天職意識と、収入・評判との関係に葛藤を抱えながら、文筆活動を主たる収入源として経済的にも頼る形で文筆に専念したからこそ、社会へのより深い関心を持つことができ、1810 年代の半ば以降に、『政治家必携の書(Statesman's Manual, 1816)』、『平信徒の説教(Lay Sermons, 1817)』、『文学的自叙伝(1817)』、『友(The Friend, 1818)』、『省察への導き(Aids to Reflection, 1825, 1831)』、『教会と国家の構成について(On the Constitution of the Church and State, 1829, 1830)』といった、社会と信仰、科学、哲学の問題を統合的に扱い、それらを融合させた社会批評を生み出すことができたのではないかという問題意識に基づいている。さらに言えば、理想と現実の間で悩みながらそれらを融合させたところにコールリッジのプロフェッショナルリズムがあるということを示し、文筆家としてのコールリッジの功績を再評価することを目指した。

初年度である 2018 年度には、1816 年と 1817 年に出版された『政治家必携の書』と『平信徒の説教』を対象として、1808 年以降の講演がそれらの作品にどのようにつながっているかについて研究を行った。『政治家必携の書』は、社会において指導的役割を果たす政治家たちにとつ

て聖書が人間の行動や社会についての洞察を与える必携の書であるとした作品で、『平信徒の説教』は主に上流・中産階級の読者に向けられた説教からなる。特に後者は、彼の講演の参加者と同じ層であった。キリスト教が示す世界と現実の社会との関連について語る必要性を感じたコールリッジが、ナポレオン戦争終結後の社会的・文化的背景の中で行った、1813年のシェイクスピアと教育についての講演、1814年4月のフランス革命とナポレオンについての講演と、『政治家必携の書』と『平信徒の説教』との関係について調査した結果、この講演の準備のために行った考察がこれらの作品につながっていることが確認できた。

また、2018年度には、これらの作品と同様、キリスト教徒としての省察の重要性を説いた『省察への導き』において論じられた「省察」の意義とあるべき姿が、すでに、「エオリアン・ハーブ」をはじめとするコールリッジの初期の詩作品において表現されていたことを論じる口頭発表「コールリッジの詩における光と音の反射と省察」を日本英文学会の九州支部大会（平成30年10月20日）で行った。

2019年度は、『文学的自叙伝』と文学をテーマとした講演との関係に着目し、文学者や文学作品の存在意義と社会における役割についてのコールリッジの理念の特質について研究を行った。当時の社会、経済、文化的背景のなかでコールリッジの講演をとらえ直すため、18～19世紀の社会と経済に関する研究書を参照し、講演とその後の著作において表明された考えの成立過程を跡付けるために、コールリッジの『ノートブック』の電子書籍版を購入し研究を進めた。7月30日から8月7日には、イギリスにおける文献調査と、コールリッジが講演を行った会場についての調査を行った。その結果、従来、階級や階級意識とともに論じられることがほとんどなかったコールリッジであるが、その機会ごとに異なるテーマで異なる聴衆に向けて行った講演とその会場を見ると、階級や階級意識という視点から講演を論じることで新たな視点からの研究ができることを再認識した。

研究の成果としては、大石和欣編『コールリッジのロマン主義 その詩学・哲学・宗教・科学』（東京大学出版会、2020）に「響きあう省察 『省察への導き』の出版に見る読者と編集者の対話」を寄稿した。

2020年度は、コールリッジの晩年の作品であり、彼の思想が最も包括的な形で表明されている『省察への導き』と『教会と国家の構成について』を対象に、コールリッジの理性論と信仰の関係についての思想の形成過程において講演が果たした役割について研究を行った。1818年の哲学講演、文学講演のためにコールリッジが残したノート・ブック、書簡、書物への書き込みを参照しながら、それらと講演が、この後期の二つの著作へと発展していく過程について確認した。書籍の読者ではなく、目の前にいる聴衆に向けて講演を行うという機会が、コールリッジにとって信仰についての哲学的考察の機会となっただけではなく、聴衆の反応を直接感じることができたという点においても、その後の執筆に与えた影響は、予想していたよりも大きいと考えられる。

最終年度の2021年度には、コールリッジが一貫して持ち続けた神の声を伝え、文学、科学、哲学という諸科学を統括する存在としての天職意識と、商業活動としての文筆業や講演活動との間で感じた葛藤が、実は執筆への原動力となり、文学者としての存在意義や同時代と未来の読者に向けてなすべき仕事についての本質的な問いの深化に寄与したのではという本研究の仮説を検証すべく研究を行った。特に、後期の重要な著作の一つ、『教会と国家について』を中心にすえ、講演の内容がどのように発展し、この著作に示された思想が形成されていったのかを、彼が講演の準備のために残した備忘録などをもとに確認した。その結果、1808年以降の文学・哲学・教育・宗教の問題を扱った講演活動が、1810年代半ば以降に出版された作品の創作に重要な役割を果たしていること、そして、それらの講演が彼のキリスト教哲学に裏打ちされ、後世にも広範な影響を持った後期の社会批評に結びついていることが確認できた。当初は、コールリッジの講演が行われた場所や会場のサイズなどについても念頭において研究を行いたいと考えていたが、イギリスでの現地調査と文献調査はコロナ禍のために叶わなかったため、その分の研究費で、コールリッジ関連の研究書、宗教、政治、哲学関係の書籍等を購入して研究を行った。

本研究により、コールリッジが本質的に両立しないものと考えていた、文筆により経済的に自立する必要性と、何ものにも邪魔されずに文学者、知識人としてなすべきだと彼が考える仕事との間で葛藤が、むしろ両者をすりあわせながら文筆に専念し、自らに課した基準を満たす作品を残すというコールリッジの文学者としてのプロフェッショナリズムに結びついていることがつかむことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 園田 暁子
2. 発表標題 コールリッジの詩における光と音の反射と省察
3. 学会等名 日本英文学会第71回九州支部大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大石 和欣編、園田暁子、和氣節子、デヴィッド・ヴァリンズ、駒馬秀太、直原典子、勝山久里、藤井佳子、吉川朗子、アルヴィ宮本なほ子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 512
3. 書名 コウルリッジのロマン主義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------